

マンガ「片町夜曲」 # 1 0 原作 シナリオ

山崎浩治

マンガ「片町夜曲」 # 10 原作シナリオ

1 「スナック香澄」表

アヤカのM「お水のバイトがお父さんにバレちゃった！」

2 同・店内

仏頂面をしたアヤカの父、一夫(タクシー運転手の制服姿)がカウンター席に座っている。

カウンター内には凍り付いたアヤカと香澄ママ、吉岡、トオルなどがある。

一夫「娘が男に酌をする姿を見て喜ぶ親はおらん」

トオル「(とりなすように)しかしですね、お父さん……」

アヤカのM「最近よくお店に来るトオルさん。オネエ所長のもとで探偵をやってます」

一夫「わしはこの仕事を軽蔑しとらんぞ……夫を若くして亡くしたわしのばあちゃんは苦勞して親父を育てた。若いころは女給のような仕事もしとったそうや。でもばあちゃんは立派な女性やった」

× ×

インサート。仏壇を背にして微笑んでいる一夫の祖母

(仏壇の遺影には軍服姿の男が写っているが、顔はよく見えない)。

× ×

アヤカのM「あたしが物心つくころに亡くなったひいおばあちゃん。いつもニコニコしてる人だったのを覚えてる……」

一夫「(アヤカにビール瓶を差し出し)……飲め」

アヤカ「え？」

一夫「今日は20歳の誕生日やろ」

アヤカ「あ、ありがと(一夫に注いでもらったビールを一気に飲み干す)」

アヤカのM「その夜、お父さんはご機嫌でお酒をたくさん飲みました」

3 片町・路上(閉店後)

千鳥足の一夫に肩を貸しながらやってくるアヤカ。

一夫「若いころのばあちゃんはな、アヤカに生き写しやったんやぞ！」

アヤカ「はいはい、分かったから。お父さん、あたしのアパートに泊まってけばいいよ」

一夫「布団ないやろ。わしはサウナで泊まる。アヤカ、気をつけて帰れ」

手を上げて、人混みに消えていく一夫の背中。

アヤカ「(見送って)お父さん、今日はありがとね」

4 片町の裏通りを歩いてくるアヤカ

アヤカのM「あたしも調子に乗って飲み過ぎちゃったみたい」

その時、通りのネオンが点滅。辺りに白い霧が出てきた。

アヤカ「(周囲を見回し)あれ、ここどこだろ？ 道に迷ったかな？」

どこかから聞こえる男の歌声。

歌声「北の都に秋たけて われら二十(はたち)の夢数う

男女(おとこおみな)の住む国に二八に帰るすべもなし」

白い靄の中から歌いながら、ボサボサ頭に白線帽、学生服に高下駄を履いた男が現れる。

学生「(アヤカに)どうかしましたか？」

アヤカ「ちょっと道に迷ったみたいで……」

学生「それじゃ僕が道案内しましょう」

アヤカ「いえいえ、そんな……(と、その時、アヤカの腹の虫が鳴る)」

アヤカのM「今夜はお酒ばかり飲んで何も食べていなかった！」

学生「腹が減ってるようですね。そのへんでライスカレーでも食べますか」

アヤカ「ライスカレー？」

学生「辛いけど、うまいですよ」

アヤカ「カレーライス！ あの……あなたはどこの学生？」

学生「四高です」

アヤカ「しこう？ ああ、市立高(しりこ)！ き、君は高校生ですか！」

学生「君は女学生？」

アヤカ「うん」

学生「それじゃ四高生を見たら鬼と思え、と教えられてるんじゃないですか」

アヤカ「んなわけないでしょ、アハハ君、面白い！(学生の肩をパンパン叩く)」

無邪気に笑うアヤカを眩しそうに見つめている学生。

5 香林坊あたり(夢の中のような風景)

歩いてくるアヤカと学生。

「美人座」という看板が見える。

学生「最近開業したカフェで、なかなか繁盛してますよ」

アヤカ「こんなレトロなお店、あったっけ……」

6 四高の校舎(同)

やってくるアヤカと学生。

学生「ここが僕の学校です」

アヤカのM「ここって、学校だけ……？」

アヤカ「もう道は分かったから、どうもありがとう(と一礼して去ろうとする)」

学生「(やや切羽詰まった感じでアヤカの背中に)また君に会えるかな？」

アヤカのM「高校生のくせに大学生をナンパなんて百年早いの！」

アヤカ「同じ金沢にいるんだもん、またどこかで会えるよ」

学生「(自分の学生服を脱いで)今夜は冷える。これを着ていくといい(と、学生服をアヤカに着せて

やる)」

アヤカ「(恥ずかしそうに)……」

#7 アヤカの部屋(翌朝)

ベッドでハッと目覚めるアヤカ。

アヤカ「(室内を見回し)リアルな夢……頭イタっ。これが二日酔いか！」

#8 「スナック香澄」店内(その日の夜)

アヤカ、香澄ママ、吉岡、美鈴、トオルなどがいる。

香澄ママ「アヤカちゃん、面白い夢を見たのね」

アヤカ「そうなんですよ。変な `しりこ、の高校生が出て来るし」

吉岡「それは `しりこ、じゃなくて、 `四高、だよ」

アヤカ「四高？」

吉岡「昭和25年まであった旧制高校。いまの大学に相当する。金沢大学の前身さ」

そこへタクシー運転手の制服姿の一夫が入ってきた。

アヤカ「お父さん！」

一夫「(カウンターに座り)アヤカと生き写しのばあちゃんの写真持ってきたぞ！」

取り出した古びた写真には赤ん坊を抱いたアヤカそっくりの女性と青年が写っている。

アヤカ「この人は！」

青年——ゆうべの四高生。

一夫「ばあちゃんのダンナさん。アヤカからすると、ひいおじいちゃんやな。戦争に行って、南方で戦死したそうや」

アヤカ「え！」

一夫「四高生だったじいちゃんは、ばあちゃんに一目ぼれして結婚したんや。そう言えば、二人のなれそめは夜の片町だったらしいな。迷子になってたばあちゃんを道案内したらしい。その夜はお互い名前も名乗らず別れたけど、あとでじいちゃんが金沢じゅうを探し回ってばあちゃんを見つけたそうや」

× ×

インサート。昭和初期の金沢を探して歩く学生。

× ×

吉岡「まるで落語の `崇徳院、みたいな話ですね」

一夫「(苦笑して)もっとも、ばあちゃんの方は生涯、じいちゃんとは夜の片町で出会っておらんと言い張っておったんやが。じいちゃんはきっと夢でも見たんやろな」

× ×

インサート。曾祖母の肩越しに仏壇に飾られた軍服姿の青年の遺影(# 2)が見える。

アヤカに学生服を着せてくれる学生。その優しい眼差し。

× ×

アヤカのM「あの人があたしのひいおじいちゃん……？」

#9 「石川四高記念文化交流館」前にやってくるアヤカ

アヤカのM「初めてお酒を飲んだ夜に起きた不思議な出来事」

アヤカ「戦争で死んじゃったけど……ひいおばあちゃんと出会えてよかったね、ひいおじいちゃん」

アヤカの視線の向こうに――

春うららの兼六園の方に向かって歩く若き日の曾祖母と曾祖父の姿が見える。

その幸せそうな笑顔。